様式第２号

視察研修先	千葉県君津市	氏名	太田　芳彦
視察研修項目	君津市商工・観光アクションプランについて		

＜市の概要＞

●君津地域

①北西部の東京湾に面したエリアは、埋め立て地であり、現在は日本製鉄が操業中。

②西部には、小糸川流域に形成された市街地があり、住宅地が続く。

③本地域で人口８万人のうち６万人以上が居住。

●小糸地域・清和地域

①北部の小糸地域の台地は木更津市と接し、「かずさアカデミアパーク」が立地。

②南部の清和地域では、鹿野山などの国定公園地域や三島湖があり、自然の宝庫。

●小櫃地域・上総地域

①北部の小櫃地域は広大な田畑を有し農業が盛ん。

②南部の上総地域は、久留里の名水、久留里城、亀山湖、亀山温泉、道の駅などがある。

＜君津市の商工業＞

・千葉県の製造品出荷額は12.5兆円（全国8位）、君津市は7,000億円（県内4位）となっている。

・鉄鋼業が製造品出荷額の９割以上を占めている。

●君津市の特産品としては

①鶏卵「永光卵」は過去に農林水産大臣賞を受賞

②花「カラー」（生産量日本一）

③小糸在来（大豆）：市内で生産される大豆の在来種。高品質で幻の大豆と言われており、納豆、味噌、豆腐。焼酎など加工品も展開。等々

④日本酒（首都圏最多６蔵）。千葉県唯一のウイスキーの製造・販売も行っている。

⑤はちみつとミードのはちみつ工房

⑥ジビエ：市内で捕獲したイノシシやシカなどの加工場や日本でも珍しいジビエ専門のドライブインもある。

●商工業の課題

①労働力の確保：地元出身者の雇用促進やマッチング、求人開拓等を進めるとともに、シニア層の労働参加や外国人労働者の受け入れなど、新たな施策にも取り組んでいく必要がある。

②企業用地の確保

・立地の良さから企業進出の打診はあるものの、用地不足により断念するケース

がある。
・君津IC周辺等、ポテンシャルの高いエリアの規制緩和による用地の確保に取り組むことが必要。
③地場産品の販売促進
・きみつふるさと物産館をはじめ、市内に地場産品を取り扱う施設は複数あるが、客数は減少傾向。
＜観光業の課題＞
①インバウンドへの対応
安定した国内市場も長期的には縮小が見込まれるなか、成長市場であるインバウンドへの対応は、コロナ後においても依然重要です。なお、県の重点課題としては、外国人旅行者への安全・安心に関する情報の伝達が挙げられており、このような国・県の方針に合わせて市内においても可能なところから着実に取り組みを進めていく必要があります。
②観光産業における体質強化
宿泊施設においては、訪日外国人客、特に海外富裕層の増加や個人旅行志向による宿泊予約サイトを使った直接予約の増加により、宿泊施設の高付加価値化、顧客ニーズへの対応が求められている。
③観光資源としての「まち」の活力と担い手
個人旅行志向や体験、滞在型へと旅行形態が変化する中、旅先としての「まち」そのものの魅力が１つの観光資源となっています。少子高齢化や人口減少が進む中、この「まち」の活力をどのように維持していくのかを地域の持続可能性のみならず、観光面での課題としても取り組んでいく必要があります。
④滞在時間、観光消費額の改善
観光入込客数は、堅調に推移しているものの、鴨川、南房総など県南部の魅力ある観光地への単なる通過点になってしまっていることから、市内での滞在時間、観光消費額を増加させ、君津を目的地としてもらえるような取り組みが必要。
⑤着実な民間投資と域内、広域での連携促進
新規出店等、民間事業者による観光に係る投資は活発です。これを地域全体の活性化に繋げていくため、観光協会等を中心とした市域全体としての連携をさらに進めていく必要があります。また、近隣３市（木更津市、富津市、袖ケ浦市）に加え、隣接する市原市、大多喜町などと、広域でキャンペーン、PR等を行うことで、観光振興策をより効果的なものにしていく必要がある。
＜感想＞
今回お邪魔した君津市さんも商工・観光には、苦労しているようで、日本全国どこも一緒のようですが、しかし、本市から見たら、羨ましい限りだなとの思いが強かった気がします。本市の商工・観光はまだまだ遅れているなとの感じでした。

様式第２号

視察研修先	千葉県南房総市	氏名	太田　芳彦
視察研修項目	道の駅を拠点とした観光振興について		

＜概要＞
南房総市は、房総半島の南端に位置し、館山市、鴨川市および安房鋸南町と隣接しています。北側には県下最高峰の愛宕山をはじめ、富山など300m以上の山が連なっています。西側には東京湾、東側及び南側には太平洋と三方を海に囲まれ、その海岸線は、南房総国定公園に指定されています。沖合を流れる暖流の影響により、冬は暖かく夏は涼しい海洋性の気候で、豊かな自然に育まれている。また、市域の一部は無霜地帯となっている。東京都心部から100㎞圏に位置しており、鉄道・高速バスなどの公共交通によるアクセス網が整備されている。自家用車では、東京湾アクアライン、館山自動車道および富津館山道路の開通により、東京都心部、神奈川県横浜市、県庁所在地の千葉市まで、時間距離にしてそれぞれ70分程度となっている。また、産業分類別就業者数は一次産業が20.5％で最も多く、約５人に１人が農林漁業従事者で特産品は房州琵琶、牛乳、食用バナナで市内観光客500万人/年の５割が道の駅に立ち寄る。
◎国が示している「道の駅」のイメージ
●道の駅の目的
・道路利用者への安全で快適な道路交通環境の提供
・地域振興に貢献
●道の駅の基本コンセプト
・休憩機能：24時間、無料で利用できる駐車場・トイレ
・情報発信機能：道路情報、地域の観光情報、緊急医療情報など提供
・地域連携機能：地場産品の提供、文化教育施設、観光レクリエーション施設などの地域振興施設
◎南房総市の道の駅設置数
・８駅（市内設置数全国１位）①富楽里とみやま②とみうら枇杷倶楽部③おおつの里花倶楽部④「三芳村」鄙の里⑤白浜野島崎⑥ちくら・潮風王国⑦ローズマリー公園⑧和田浦ＷＡ・Ｏ！
◎道の駅を核とした観光と農林水産業の一体的推進するために
！！地域の自発的で持続的な発展！！
プロジェクトの目標⇒地域の産業・文化の振興・情報の発信
●活性化の方向
①交流人口を増やす（日帰り客の誘致）
②出荷規格外の「びわ」を活用して商品開発

③近隣市町村を含めた、地域情報発信
④地域資源・文化を見直して、住む人の誇りを
●活動の方向
①エコミューゼ（分散配置施設の統合運営理論）の手法による町全域の活性化
②活性化施設（枇杷倶楽部・花倶楽部等）の自活と、地域振興
③産業と文化の情報化
④雇用の拡大と新しい産業づくり
⑤差別化できる商品開発
⑥地域住民の憩いと学習・文化の場づくり
◎地域資源“びわ”を活かしたオリジナル商品開発
◎「一括受発注システム」よる「日帰りツアー」モデルの流れ
「エコミューゼ（分散配置施設の統合運営理論）の手法による、地域をまるごと活用した観光客誘致を行った。世界遺産や特級の観光資源が無い富浦町は、近隣の市町村も含めた小さな資源、農業体験（びわ狩り、苺狩り、花摘み等）や歴史、景観と食事を組み合わせパッケージ化し、一括で観光会社に販売、観光日帰りバスを誘致した。
＜感想＞
　書ききれない程、多くの事業を展開しており、携わっている方が一生懸命やっているなと感じた。やはり、本市も、まずは、観光業・商工関係の方たちが考えて実行に移さないと本市の未来は暗いままだなと感じてきた。

様式第２号

視察研修先	千葉県鋸南町	氏名	太田　芳彦
視察研修項目	都市交流施設・道の駅 保田小学校について		

＜概要＞
東は山、西は海に囲まれた鋸南町は、南房総特有の温暖な気候に恵まれ１年中どこかしらで花が咲き、心地よい風がほほをなでます。ゆっくりと時間が流れる、この小さな町をぐるっとまわってみてください。きっとお気に入りの風景と町民の気さくな笑顔に出会えます。
少子化に伴い閉校となった学校は全国でも先駆的な取り組みである都市交流施設・道の駅保田小学校としてリボーン。「小学校を残したい！」という地元の皆様の熱い思いをもとに新たな鋸南町ムーブメントを巻き起こす拠点です。この様な道の駅等を活用した地域再生はとても重要であり、今後ますますこの保田小ステージで地域の皆様がそれぞれの立場で生き生き参画し演じることが「未来の元気な鋸南町を創る」近道です。さあ皆で楽しく登校しましょう！
●まちのコンシェルジュ
鋸南町の観光情報のほか、鋸南町の生活情報などをコンシェルジュが案内します。また大型モニターや情報端末なども用意され、交通情報、天気情報の提供、宿泊・温浴施設、公共施設の受付・フロントとしての役割もしている。
●こども広場
親子で楽しんでいただく遊び場です。ジャングルジムや遊具があります。
●まちの縁側
旧校舎の廊下を利用したロングリビングスペースです。日中は、自由にくつろいでいただけ、イベント時にも活用される多目的スペースです。
●里の原っぱ
旧校舎の前面は、鋸南町の里山をイメージした原っぱ。緑豊かな自然と青空の下、四季折々の花が咲き、子どもも大人も自然に触れあえる憩いの場です。
●いろんなジャンルの食事を提供している。
＜感想＞
　今までに多くの道の駅を見てきたが、小学校の閉校を機に、こんなスケールの「道の駅」を開校したことに感激しました。やはり何事も、発想の転換を心掛けて、ことに当たりたいと思いました。

様式第２号

視察研修先	千葉県市原市	氏名	太田　芳彦
視察研修項目	リノベーションまちづくりについて		

＜概要＞
リノベーションまちづくりとは、地域の人・空き店舗・公共空間といった「今ある資源」を活用し、新たに起業したい人の挑戦を支援することで、エリアの価値を高め、若者や女性が集うような魅力あるまちづくりを目指す取り組みです。
新たな公共投資によって「まちを造り替える」のではなく、遊休不動産や地域で活動する人材、民間の創意工夫を生かし、低リスク・低コストでスピーディーに事業や活動を生み出していく点に特徴がある。
市原市では、令和２年度から市、商工会議所、町会長連合会等が連携する実行委員会を中心に取り組みを進めてきました。その結果、公園や商店街、古民家など身近な場所を舞台に、多様な主体による交流や挑戦が広がり、市民が思い描いてきた暮らしの姿が着実に形となっています。リノベーションまちづくりは、行政施策と民間活動をつなぎ、地域の自走力を高めるまちづくり手法です。
◎いちはらリノベーションまちづくり塾
空き物件・遊休不動産を題材に、チームで事業プランを考え、実事業化を目指す短期集中・実践型プログラム。まちづくりや不動産、事業づくりの第一線で活躍するプロとともに、「やってみたい」という想いを、現実的なビジネスへと落とし込んでいきます。
●スクールで得られるもの
・講師によるリノベーションまちづくりの事例紹介
・講師や受講生同士の対話による動機や目的の明確化
・受講生同士やOB/OG、地域とのネットワーク構築
・スクール終了後、事業化までのアフターフォロー
●いちはらリノベーションまちづくり塾の流れ
ホームルーム⇒物件視察・街歩き⇒リノベ事例見学⇒グループワーク⇒公開プレゼン⇒プランの事業化へ
●スクールから生まれた取り組み
・五井朝市：日中閑散としている五井駅周辺のシンコープラザにて、毎月第３日曜日、「夜のまちに朝食を」をコンセプトに委員会が開催する朝食マルシェ。市内の飲食店や新鮮な野菜、果物が並びます。
・シェアキッチン：個人シェフや生産者が集まり、ともに食を通じた交流や地域づくりに取り組み、地元経済の循環を促進しています。
・佐川ビル：リノベーションスクール参加をきっかけに、実家の３階建てを改装し、ショップやギャラリー、イベントスペースなどが混在する拠点に。

・姉崎のまちづくり団体：リノベーションスクールをきっかけに、connect姉ケ崎、NICHE姉ケ崎といった団体が設立。それぞれ姉崎でイベントなどを開催しています。
・Anesaki Garden Market:駅前の空地を活用した月１回の体験型マーケット
・コミュニティガーデン：姉ケ崎駅周辺には５つの公園がありますが遊具やベンチの整備を待っている状況です。そこで、am-姉ケ崎が公園愛護団体として活動を開始。管理者として清掃や草刈りを担うとともに、公園に花壇やベンチを設置できるようになりました。
＜感想＞
　市原市は人口26万人の市で、成田空港、羽田空港まで、ほぼ１時間の距離に位置し、大都会の感じがしました。工業製品出荷額も５兆円を超えているとのことで、羨ましい限りの市でありました。本市にも中央工業団地がありますので、多くの雇用が生まれるよう頑張っていきたいと思います。